持続可能な取組に不可欠な『笑顔』の理由

沖縄文化芸術振興アドバイザー
南島詩人
平田大一

ＮＨＫ朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」で脚光を浴びた「小浜島」が、今また別の意味で世界から注目されている。話題の的は「ＫＢＧ84（ケイビージー・エイティーフォー）」と言う名のアイドルユニットである。普通でないのはそのメンバー構成だ。平均年齢84歳、最高齢は97歳、１９９３年から島の一人暮らし高齢者支援ボランティアグループ「うふたき会」がサポートする、ご長寿アイドル「小浜島ばあちゃん合唱団（Kohamajima Baachan Gasshoudan）」こそが、その話題の主役である。

「天国に一番近いアイドルユニット！」というドキッする様なキャッチコピーを笑顔で掲げ、２０１５年10月には遂にＣＤデビューも果たし、島で撮影されたプロモーション映像がネットで紹介されるや瞬く間に世界のネットユーザーを中心にホットなニュースが駆け巡った。イギリスのＢＢＣがわざわざ周囲16キロ、人口６００名足らずの日本最南端の離島を取材に訪れ、シンガポールからは国内最大級の音楽イベントに招聘され、その一部始終がドキュメント番組としてＮＨＫＢＳ１で放映されるなど、話題性に事欠かないから本気で凄い。彼女達の最大の夢である「紅白歌合戦」初出場もいよいよ見えて来た！…と周辺も鼻息荒くなってしまうのも無理はない。ただしこの事案、少々急がねばならない。ご高齢アイドルにとって１年１年は生死に関わる案件だからである。悠長に「来年こそは！」等と語れないのである。

そもそも、この「おばあちゃん合唱団」今から20数年前、小浜島が実家の私のもとに訪れた「うふたき会」リーダーの花城キミさん（同時70歳）からオリオンビール６缶で口説かれて結成したもので呆け防止のリハビリを兼ねた「うたあしびー（歌遊び）」が始まりだった。１９９９年に私が演出家として本格的な活動開始するにあたり島を離れるも合唱団の取り組みはその後も脈々と続き、結成から２０年にあたる２０１３年９月地域文化の発展に寄与した団体などに贈られる「サントリー地域文化賞」の受賞を機に一気に全国的に知られることとなったのである。

シンガポール州の保健省上級国務大臣エイミー・コールさんはこうコメントしている。「長寿社会に直面している我が国にとって、豊かに老いることは最大の関心事であり課題でもあります。ＫＢＧ84の皆さんの美しく老いる姿は我々の理想なのです」

夫に先立たれ、中には息子をもグソー（後生＝あの世）に見送るなど、様々な艱難辛苦を乗り越えて今があるおばあちゃん達の底抜けな明るさは、世代も地域をも包み込む母性愛の塊である。国や文化の違いも超えたまさに「ちゅらさんのオバー」の笑顔が地域観光の文化資源として、新たな交流文化の可能性を感じさせてくれるのである。